

に、著者は完成前に急逝され、本書は小樽商科大学の山田家正博士が遺稿を整理されることにより刊行を見た。  
(千原光雄)

水野寿彦・高橋永治(編): **日本淡水動物プランクトン検索図説** 532pp. 1991. 東海大学出版会. ¥15,450.

日本の淡水藻は、1977年に「日本淡水藻図鑑」(内田老鶴圃)が出て同定がしやすくなったが、鞭毛をもって泳ぐ藻類については、一部を除いて掲載種数が少く、この点は物足りないものであった。本書は動物プランクトンの名称をもつが、後半の約120頁を「植物性鞭毛虫綱」として鞭毛をもつ藻類を扱っている。各藻群の種類数と執筆者は、クリプト藻類9(原慶明・恵良田眞由美)、渦鞭毛藻類56(安達六郎)、ミドリムシ藻類125(加藤季夫)、黄金色藻類106(高橋永治)、ラフィド藻類5(庵谷晃)、ハプト藻類2(高橋永治)、緑藻ボルボックス類58(野崎久義)、プラシノ藻類2(野崎久義)である。それぞれには図を中心とした種の検索が添えられる。淡水プランクトンの同定には先の「日本淡水藻図鑑」と本書の併用が不可欠となろう。  
(千原光雄)

馮 宋明(責任編集): **拉汉英种子植物名称** vi+1036pp. 1989. 科学出版社. 29.20元. 郑 儒永他編: **孢子植物名詞及名称** iv+962pp. 1990. 科学出版社. 35.50元.

中国の植物について、種子植物は学名、漢名、英名の対照表であり、孢子植物については学名と漢名の対照表である。種子植物の英名は、学名をそのまま英語読みにしたものが多く、たとえばトベラの英名を *Tobira Pittosporum* とするなど、英語国で通用するのかどうかと首を傾げるものも

ある。その点、孢子植物の方は、実際使われている英名だけが挙げられており、俗名索引で検索できるようになっている。一方、種子植物の方は漢名の索引があるのに、孢子植物にそれがないのは一寸不便である。孢子植物の方は英語の学術用語の模準漢訳も与えられている。学名と漢名がこのように包括的に対比され、便利な書である。

(岩槻邦男)

内村悦三: **熱帯林のすがた**(のぎへんのほん 50) 1991. 研成社. ¥1,300.

環境問題がマスコミにも広く取り上げられるようになってきた。熱帯林の伐開の問題も例外ではない。1992年の国際環境会議の主要なテーマの1つになるらしい、という雰囲気がある。一層熱帯林とそこにみられる生物の多様性に人々の関心を惹きつける。しかし、残念ながら、今世間に流される熱帯林の話題は多少軽薄な見聞談にもとづいたものである。最近、熱帯林について、秀れた書物も刊行されているが、研究者の書いたものには、植物学的には秀れていても、一般の人々にとりつき難いものが多い。

「のぎへんのほん」シリーズは科学の現代的問題を一般の人々にも分かりやすく平易に紹介するために編集されているものであるが、50冊目となった本書は、著者の長年の熱帯林の調査研究の成果がやさしい文章で綴られた好著である。熱帯林を見たことのある人にもない人にも、熱帯林について考えてみるよいきっかけを与えてくれるものである。

残念なことに、初版には幾つかのミスプリントなどが残っているが、広大な熱帯林の諸問題を1冊の本にまとめる難かしい仕事のことを考えればさしたる難点ともいえない。  
(岩槻邦男)